

日本医史学会神奈川地方会一九九三年新年大会

と き 一九九三年一月一六日(土) 午後三時～五時

ところ 横浜市健康福祉総合センター

〈一般講演〉

一、オーレオマイシンが初めて用いられた発疹チフスの流行

佐分利保雄

星野 重二

二、アスクレピオス

日野 英子

三、ペスト残影、その一ウィーンの巻

滝上 正

〈特別講演〉

映像と医学史をめぐる

大村 敏郎

神農祭(第40回) 挙行

湯島聖堂(東京都文京区湯島一―四―二五)の神農廟に安置される神農像は、もと雑司谷の幕府北御薬園にあり、のち江戸医学館に祭祀された由緒ある医薬文化財である。昭和二十八年、湯島聖堂神農史蹟礼賛会によつて神農祭が復活され、以後毎年十一月二十三日の勤労感謝の日に斯文会と神農奉讃会が神農祭をとり行っている。日本医史学会は平成三年度より

神農奉讃会に加盟した(現在の加盟団体は一〇団体)。

平成四年十一月二十三日に挙行された第40回神農祭は、日本医史学会と医道の日本社が当番幹事となり、午後二時より神農廟にて祭礼、午後三時より斯文会館講堂にて記念講演(林克大東文化大学助教授「五臓の五行配当について」、午後五時より同講堂にて懇親会がもたれた。日本医史学会では神農祭の担当幹事に小曾戸洋を指名し、懇親会では小曾戸が進行役をつとめ、司会は藏方宏昌本学会理事が担当し、盛会裡に終了した。本年度以降も本学会々員の御協力と御参加を期待したい。

(小曾戸 洋)

美濃大垣の名医・北尾春圃顕彰碑除幕式

平成四年十月十八日、岐阜県養老郡養老町室原の福源寺において、北尾春圃顕彰碑の除幕式が盛大にとり行われた。

美濃大垣の名医・北尾春圃(一六八五―一七四一)は正徳・享保の二度の朝鮮通信使との交流を通じて、全国的にその名を知られた名医である。現在も『桑韓医談』『提耳談』『当壮庵家方口解』などの著書によつて、漢方家は臨床面でも少なからぬ恩恵を受けている。尾張藩医浅井貞庵が『方彙口訣』の中で、「日本の医者では北尾春圃が一番の上手なり。古方家の如く理屈のみ云う者の比ではない。『口解』や『提耳談』を能く読みてみるが好い」と述べているように春圃の医術は極めてすぐれたものであった。

この業績を称えて北尾春圃顕彰会は、日本医史学会、日本東洋医学会、東亜医学協会の後援のもと、名誉会長に矢数道明先生を戴き、安福彦七会長、安井広迪委員長及び地元養老町、大垣市の方々をはじめ、広く全国の有志の協力を得て、春圃菩提寺である福源寺に顕彰碑を建立した。

当日は、清水敏郎養老町々長をはじめとして、東亜医学協会より矢数道明会長、矢数圭堂常任理事、北里東医研医史文献研究室の小菅戸洋室長ほか、総勢百数十名にのぼる参加者を得て、除幕式が挙行された。

式典のあと法要が営まれ、その後、三人の講師により講演。岐阜市歴史博物館の寛真理子氏が、「朝鮮通信使と北尾春圃」と題して、江戸時代の朝鮮通信使の全般的な解説と春圃とのかかわりを述べた。次いで安井広迪氏が春圃の医師の実際を紹介。最後に安福彦七氏が、春圃の人物像の紹介をして、幕を閉じた。

(土屋 伊磋雄)

例会抄録

ビデオ「呉秀三―狂気の立ち会い人」

岡田 靖雄

これは民間衛星放送WOWOWで、一九九二年五月一日昼に二五分間放映されたものである。

いまや世紀末で、一〇〇年前の世紀末に超常現象、宗教、

肉体―精神問題などの迷宮に足をふみいれて強力なメッセージをのこした一三人の流星たちをとりあげる、といった主旨で企画された「迷宮十三伝」の第七回。ほかにとりあげられているのは福来友吉、長岡半太郎、赤木城吉、井上円了、宮沢賢治、木村鷹太郎、丘浅二郎、西川一草亭、清家新一、夏目漱石、出口王仁三郎、南方熊楠。このうち何人かは呉先生と交際があり、また何人かは異才とともに精神変調をもっていた。それらの人のまんなかに呉先生がおかれていたことは興味ふかい。

この製作にあたったのはセディックという会社で、筋書きをつくりあげたところで、わたしのところへもってこられたので、一部分の誤りは訂正したが、すこしの誤りがのこった。若者むけのおもしろい筋にしたというが、製作者はわたしの著作などで、呉先生について比較的よく勉強していた。

わたしは最後の四分間の解説で、呉先生がかかげた精神科医療の理念の先進性、それらがまだ実現されていないことをのべ、また森林太郎、夏目金之助を例に、呉先生が目にした創造の苦しみについてのべている。ちょうど呉先生没後六〇年にあたる。

このビデオは製作会社から呉先生のご遺族におくってもらったが、もうほとんどが孫の世代。祖父のことはちょっときいてはいたが、これでよくわかった、とよるこんでいたのだ。医学史普及のためにも、こういう機会はできるだけ利用したい。

(平成四年十二月例会・於順天堂大学)